生育途中の地上部切除による効率的なサトウキビ原種苗生産技術

春植え用原種圃場において、生育途中（5～6月）の地上部を切除することによって、単位面積当たりの健全芽子数が増加

背景・目的

・春植え用の原原種は、毎年2～3月に原種圃場に提供されるため、原種圃場の生育期間が長い
・生育期間の長期化に伴い、硬化芽子が増加し、虫害や台風、過剰な茎伸長による倒伏等の被害が増加
・原料用の圃場を確保するため、種苗用の圃場を縮小することが課題
・生育途中の地上部切除による新たな原種苗の生産技術が必要

成果の内容

・生育途中の地上部切除によって、その後発生する茎数は増加、茎長は短縮（図1）、硬化芽子は減少、健全芽子数は増加（図2）
・健全芽子数が多いため、原種圃場面積の縮小が可能（図3）
・倒伏程度、茎の曲がり程度が小さくなるため、収穫の作業性が向上（図1）



図1　収穫時の茎
（左から切除無し、5月切除、6月切除、7月切除）

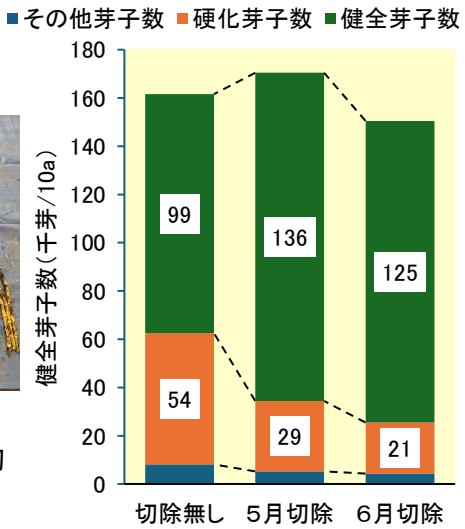


図2　芽子数

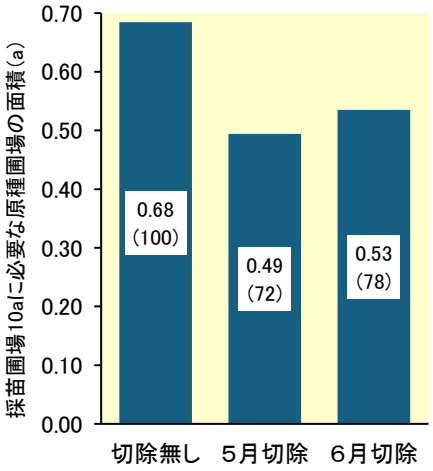


図3　採苗圃場10aに必要な原種圃場の面積
注）（　）は切除無しを100とした時の指数

期待される効果

・原種圃場における健全芽子数が増加し、効率的な原種苗の生産が可能

効率的・安定的な苗供給体系の確立

＜本情報の栽培条件等＞
・供試品種は、「Ni23」、「NiF8」。
・地上部切除処理は、中耕・培土後、畝面が均平になった時期に、刈払機で行った。

○普及対象・範囲
奄美地域のサトウキビ原種生産者及び技術員

鹿児島県農業開発総合センター
徳之島支場作物研究室

（公募：奄美群島糖業振興会）

（R08）